

巻頭言

旅はまだ終わらない
On a journey to one best way

今から 20 年前の 1995 年は、阪神淡路大震災があった年ですが、その年の春に、表面分析に関する知識、技術、成果を共有し、表面分析法がより広く利用されるための活動を行うことを目的として、表面分析に携わっている研究者や技術者が集まって、表面分析研究会が設立されました。そのときに発行された JSA の第 1 巻第 1 号の巻頭言に、「わが国にはこれまでに、分析手法に関する手続きや、分析手法の高度化のための工夫などを文書にして残しておくことがほとんどおこなわれていない。」と書かせていただきました。元来わが国では技術は口伝で伝えることが原則でした。1846 年島津家 27 代藩主島津斉興が製造を始めた「薩摩切り子」は、深みのある色合いと美しい幾何学的文様の特徴を持ち、非常に高く評価されたのですが、1863 年の薩英戦争で薩摩のガラス工場が壊滅的打撃を受けた後、生産されなくなりました。その後再興が試みられたのですが製造技術を記した文献が無いため、試行錯誤を繰り返しました。最大の難問は往時と同じ紅色で、「薩摩の紅硝子」と珍重された紅色を安定に発色させることでした。そして最後に残された黄色の鮮やかな発色に成功したのはおよそ 120 年後の 1989 年です。もし、口伝では無く詳細な技術を記した文献が残っていれば、もっと早く、容易に再興できたに違いありません。

表面分析研究会の発足とほぼ同時期（1991 年）になりますが、ISO に、表面化学分析の標準化を扱う TC201 委員会を日本が幹事国となって設置することが決まっていた。我々の目的を実現するためには、表面分析法を標準化することは最も重要な手段ですので、我々の旗印を「表面分析法の標準化」としました。標準化という作業は、表面分析を行う際に発生する誤差やばらつきを与える原因を一つ一つ科学的な検証に基づいて潰していき、最後に、それらが最も小さくなる「ワン・ベスト・ウェイ」を見つけることです。これは「口伝から標準化へ」の長い旅路です。高杉晋作は「一里行けば一里の忠を尽くし、二里行けば二里の義をあらわす」と言いましたが、我々の旅も「ワン・ベスト・ウェイ」を見つけるために「一里行けば分析技術を記した文献を JSA に残し、二里行けばデータベースにデータを残す」となります。我々の旅路は海外にも向かっています。研究会が主催する PSA は、NIST の Powell 博士から「The establishment of the PSA international conferences (in association with TC 201 meetings) was also a key factor in improving communications between Japanese (and later Korean) scientists and other scientists in the world.」という評価をいただいております。国際的にも表面分析研究会の活動は注目されています。

表面分析研究会の活動は「表面分析に関する知識、技術、成果を共有して表面分析法の標準化を進める」ということですが、これは通常の学会活動の枠を越えています。我々がこれまで旅をしてきた 20 年間は、たしかに長い年月でした。旅の途中では、道が枝分かれすることがあり、そのたびに「どちらの道を取るべきか」という議論がありましたし、これからもあるでしょう。しかし、我々が掲げた「表面分析法の標準化」という旗印はこの 20 年間変わりませんでした。そして、この旗印を掲げながら「ワン・ベスト・ウェイ」を求める旅に終わりはありません。

"Twenty years is a long time, but not long enough to change a man's nose from a Roman to a pug." (*After Twenty Years*, O. Henry)

吉原 一紘（初代 SASJ 会長）